

が出る。

「伊村に揃えさせるか？」

必要なものであれば正も金を惜しまぬであろう。

（俺もまあ、少しは出してやってもよい）

はるは大切な、家族であるのだから。

昼間は人の溢れる清水寺の境内も、夕暮れ近いこの時間は人の姿もまばらになっている。

参拝を終えた人の流れに逆行して、俺とはるは幾つかの御堂や門を通り抜けて本堂に参った。

本尊の千手観音は秘仏のため見る事が出来ないが、それでもはるは熱心に祈っていた。

何を祈ったのかは判らぬが、その願いが叶えばよいと、俺は初めて人のために祈った。

「勇様、はいどうぞ！」

と、しばらくどこかへ行っていたはるはいきなり何かを差し出した。

それは艶やかに青い綾織の守り袋だった。

「これを、…俺にか？」

「はい！それとこれはみんなに」

「みんな…？」

「ご兄弟の分と、お父上様の分。あとたえちゃんとか富さんと喜助さんと加賀野さんの分も！」

小さな巾着いっぱい詰めた様々な色の守り袋を見せながら屈託なく微笑むはるに、つられて思わず笑みが漏れる。

「これでは欲張りすぎではないのか？」

「大丈夫です。きつと。さつき十分お願いしましたから！」

「そういうものではなからう？」

呆れる俺を気にする様子もなく、今からそれを渡す時を想像しているのか、はるは嬉しそうに巾着を抱える。

そんな些細なことを楽しめるはるが、妙に眩しかった。

「あ、でも」

と、はるは思いついたように目を瞬く。

「正さんには金運のお守りの方がよかったのかも」

独り言のようにそう呟きながら。

小さく笑ったはるは：ひどく幸せそうで。

また、つきり、と胸が痛んだ。

「あ、でも」

と、はるは思いついたように目を瞬く。

「正さんには金運のお守りの方がよかったのかも」

独り言のようにそう呟きながら。

小さく笑ったはるは：ひどく幸せそうで。

また、つきり、と胸が痛んだ。

「あ、これが清水の舞台ですね！」

目的の場所を見つけたはるは子供のようにはしゃ